

「被災地に学ぶプロジェクト」活動報告

Report on “the Project to Learn from the Field Study
on the Affected Area of Great East Japan Earthquake”

関西大学 社会安全学部
菅 磨志保

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Mashiho SUGA

関西大学 社会安全学部
亀井 克之

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Katsuyuki KAMEI

関西大学 社会安全学部
金子 信也

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Shin-ya KANEKO

関西大学 社会安全学部
城下 英行

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Hideyuki SHIROSHITA

関西大学 社会安全学部
河野 和宏

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Kazuhiro KONO

関西大学 社会安全学部
永松 伸吾

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Shingo NAGAMATSU

関西大学 社会安全学部
林 能成

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Yoshinari HAYASHI

関西大学 社会安全学部
越山 健治

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Kenji KOSHIYAMA

関西大学 社会安全学部
元吉 忠寛

Faculty of Safety Science,
Kansai University

Tadahiro MOTOYOSHI

SUMMARY

This paper reports on “the project to learn from the field study on the affected area of Great East Japan Earthquake” conducted by the Faculty of Safety Science Kansai University. The purposes of the project are to support the students which try to study on site and let them get practical findings through the study. Those are successfully accomplished.

Key words

Great East Japan Earthquake, Field Study, Affected Area

1. はじめに

防災・危機管理に関する独自の教育プログラムをもつ社会安全学部にとって、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、大きな衝撃であった。多くの教員が、それぞれの専門分野で対応に忙殺される中、学生達からも「何か支援ができないか」という声が上がってきた。普段から災害や事故について学んできた学生の意識は高く、春季休暇中も大学に集まり、この災害への関わり方について話し合う動きもみられた。社会安全学部では、こうした動きを尊重し、学生達の活動や学びを、学部として応援する体制をつくり、「被災地に学ぶプロジェクト」として、試行的に幾つかの応援プログラムを企画・実施した。

本稿では、2011年度に「被災地に学ぶプロジェクト」として行った一連の活動を報告し、教育実践として本事業を行った意義について若干の考察を試みる。まず、応援体制の立ち上げから、最初の応援プロジェクトの企画・実施に至る経緯を詳しく報告した上で(2.)、2011年度に行った他の2つの応援プロジェクトの概要を紹介する。また、学生達が被災地から戻った後の学びを支援する取り組みとして、現地での経験を記録し、伝えていく活動(活動報告)を紹介し(3.)、一連の活動から学生達が何を学び、本学部の教育実践として何が得られたのかについて考察する(4.)。

2. 応援体制の発足とプロジェクトの企画・実施

2.1 「被災地に学ぶプロジェクト」

東日本大震災が発生してから数日後、ミューズキャンパスの危機管理マニュアルの作成に関わっていた学生グループや、学祭実行委員会のメンバーから、「社会安全学部生として何かでき

ることが無いか考えたいので、災害対応に詳しい教員と意見交換をしたい」という要望が出された。当時はまだ大きな余震が相次ぎ、原発事故も緊迫した状況が続いていたため、意見交換では、被災地に行かなくてもできる支援を考えると、社会安全学部生としてこの災害に関わる事態の推移をしっかりと把握し、学ぶことも必要だ、という意見が多く出た。その後も学生達は、学内で議論を重ね、募金活動を行うなど、この震災にどう向き合うかを考えていた。

新年度(2011年4月)を迎え、新入生が入ってくると、学生の中から「被災地でボランティア活動をしたい」「社会安全学部生として、被災地で起こっていることをしっかり見ておきたい」という声が多く聞かれるようになっていった。しかし、2010年4月に学部を開設してからまだ1年しか経過しておらず、在校生も1、2回生のみであり、上級生や他学部・他大学との接点も少ない中で、学生独自の活動を展開することが難しい状況もあった。

こうした状況を踏まえ、5月の教授会で「学生に今の被災地を見てもらうことは非常に重要だ。学部として何ができるか検討し、教職員が応援する体制を作ってはどうか」という提案が出された。この提案はその場で合意され、具体的な応援の内容を企画・検討し、実施していくための委員会(名称「被災地に学ぶ企画委員会」、以下企画委員会)を設置することが決まり、6人の教員が委員を務めることになった。以後、社会安全学部では、この委員会が企画する学生の活動と学びを応援する活動を「被災地に学ぶプロジェクト」と位置づけ、他の教職員の協力も得ながら、具体的なプロジェクトを企画・実施していくことになった。

以下では、2011年度に「被災地に学ぶプロジェクト」として行った3つの応援プロジェクト(津波被災地訪問見学(8月)、被災大学の初動

対応調査（8～9月）、農山漁村の復興支援活動調査（2～3月）のうち、最初に行った「津波被災地訪問見学」を取り上げ、その企画から実施に至る経緯を詳しく見ていくことにする¹⁾。

2.2 「津波被災地訪問見学」の企画と実施

(1) 意向調査

当初、教員の間では「本学部の趣旨から考えると、被災地に行って、単発的に労働力を提供するよりも、被災地を見て、そこで考えてもらうことが重要ではないか」という意見が多く、被災地を見学するバスを出してはどうかという提案も出されていた。しかし、検討の結果、まずは応援の対象となる学生達自身が、東日本大震災に対してどのような考えを持っているのかを把握しておいた方が良さだろうという結論に至り、学部生全員を対象とするアンケート調査を実施することになった（「東日本大震災に関するアンケート」）。調査は6月第一週目の必修の授業の後で行った。その結果、約2/3の学生達が被災地に行きたいという希望を持っていること、しかし、費用や情報の不足を感じていることなどが明らかになった。

(2) プロジェクトの企画

この調査結果を受け、企画委員会では、津波被災地を見学する具体的な企画を立てることになった。企画当初から、見学の時期としては、授業が終わり、被災地の状況も現在よりは落ち着いているであろう夏季休暇中に行うこと、学生全員を連れていくことは難しいため、有志を募る形になるであろうことは、はっきりしていた。しかし、これら以外のことについては、例えば、①被災地に負担をかけないこと、②学生の安全を確保し、③できるだけ多くの学生が参加できるような条件を整えること、④学生の主体性を尊重し、⑤学生にしっかり現場に触れて

考えてもらう場を提供することなど、様々な事項に配慮することが求められていた。当時、これらを同時に満たす企画を立てることはかなり難しい状況にあったが、幸い、南三陸町で炊き出しや物資提供を中心とする活動を行っていた市民団体「宮城復興支援センター」²⁾の協力が得られたことで、被災地への負担を抑えながら（上記①の配慮）、被災者や支援者と学生が直接交流を図るような場面を確保してもらうことができ（⑤）、また費用の面でも便宜を図ってもらうことができた（③）。ただし、現地でのプログラムに、学生の考えや希望を反映させることには、限界があった（④）。

この企画の中で、最も議論になったのが、現地までの移動であった。教職員の間でも、学生の主体性を尊重（④）する観点から、仙台までの往復の移動は、費用も含めて学生自身に確保させた方が良いという意見と、安全性（①）を考えると、大学から全行程をカバーするバスを出すべきだ、という意見に分かれた。最終的には学生自身で往復の移動を確保してもらうことになったが、学部としても初めての試みであり、決断に踏み切るまでに時間がかかった。また被災地にいる受入れ先の市民団体やバス会社との連絡・調整にも時間がかかり、企画の内容が確定したのは7月中旬であった。

(3) 情報提供

参加者の募集は、上述の企画が固まってきた7月上旬から開始したが、これに先立ち、被災地に行くことへの動機づけとして、東日本大震災に関わる情報提供を行った。

企画委員会では、アンケート調査でも要望の高かった情報（被災地の被害・復旧状況、支援活動状況など）を中心に、他の教員の協力も得ながら情報収集を行い、3階の交流スペースに掲示板を設置して、収集した情報を張り出して

いった。またこれと並行して、インフォメーションシステムを通じた不定期の情報提供を4回に亘って(6/17, 6/29, 7/6, 7/15)行った。

(4) 事前研修

参加者が確定(7月下旬)した後、現地に行って学ぶために必要な知識を習得してもらうために、彼らに対する事前研修も実施した。研修の内容は、「被災地に行く学生に必要な知識・情報」という観点から、①地震・津波のメカニズム、②原発問題と放射能汚染、③被災者の心理、④心身の安全衛生環境の確保、⑤ボランティア活動、⑥復興支援・調査、という6つのテーマを設定し、2日間(7/28, 29)のカリキュラムを編成して実施した。

研修の実施に際しては、企画委員以外の社会安全学部の教員が講師として、また学外の研究者への講師依頼、会場設営、記録など、様々な形で協力した。

さらにこの研修の内容を、他学部で被災地に行くことを予定している学生にも活用してもらえるように、学生支援室の協力を得て、千里山キャンパスで研修の中継してもらった。また録画した講義録も貸し出せる体制を作り、当日会場に来られない学生にも閲覧してもらえるように配慮した。特に、放射線に関する講義は「分かり易く、また“正しく恐れる”ために必要な知識が習得できた」と学生達にも好評であり、繰り返し閲覧してもらえる教材となった。

(5) プロジェクトの実施

津波被災地訪問見学は、8月23～24日に実施した。企画委員6人以外の教員2名も引率に協力し、学生の参加者40人と教員8人が1泊2日の行程を共にした。

初日は、朝9時半に仙台駅に集合し、そこからは、仙台市内のバス会社の協力を得て、貸切

りバスで移動した。まず、仙台市内から被災した沿岸部を見ながら南三陸町まで移動し、南三陸町でバスを降りて被災した現場を歩き、現地の人々の声に耳を傾け、避難所になっていた旅館に宿泊した。翌日は、南三陸町、気仙沼市の浸水した市街地を見学したり、被災した学校を訪問しながら、仙台まで移動した。行程の詳細は、表1に記す通りである。

今回、このような訪問見学を実施できた背景には、宮城県北の沿岸部(主に南三陸町)で被災者支援活動を行ってきた市民団体「宮城復興支援センター」の全面的な協力が得られたことがあった。見学ルートや訪問先との調整は、この団体に行ってもらった。また、訪問見学の全行程をこの団体の事務局長が同行し、バスの車窓から見える被災地の風景と、その震災直後の状況などについて一つひとつに丁寧な解説を行ったり、学生達の質問にも丁寧に応じてくれた。長いバスでの移動時間も貴重な学習の場となった。

もう一つ、今回の見学で特筆すべきことは、既に述べたように、仙台までの往復の移動を学生自身が負担する形を取ったことである。企画委員会では、多くの学生が夜行バスを利用するであろうことを想定し、集合時間を早朝にしたが、複数の夜行バスに遅れが生じ、集合時間に間に合わない学生が相当数出るようになった。しかし、遅れた学生達は、仲間同士で互いの状況を確認しながら、現状と今後の見通しを速やかに教員に知らせてくれたため、後発バスの手配など比較的スムーズに対応することができ、遅延によるマイナスの影響を最小限にとどめることができた。

また、現地集合にしたことで、夜行バスではなく、新幹線を利用して前日に仙台に到着する者もあり、解散後に仙台に残ってもう一度被災地を見に行く者、ボランティア活動に参加する

表1 津波被災地訪問見学の行程

<p>8月23日(火) 09:30 仙台駅発→バスで南三陸町へ 12:30 南三陸町・志津川地区到着, 見学 12:45 南三陸町・防災庁舎跡見学 13:00 地元市民団体「よみがえれ南三陸」訪問, 活動内容を聴く 14:00 避難所(バイサイドアリーナ)へ 南三陸町仮庁舎, ボランティアセンター, 病院等の見学 14:30 南三陸町・清水浜見学 15:00 南三陸町・歌津地区見学 16:00 宿泊施設「ニュー泊崎荘」到着 16:30 宿泊施設にて, 炊き出し準備 16:45 地元の仮設住宅の入居者と交流 17:00 炊き出し開始 18:30 一日の活動の振り返り・意見交換 20:00 片付け, 就寝準備 8月24日(水) 08:20 泊崎荘発→気仙沼市へ移動 09:30 気仙沼市(小泉, 漁港付近)をバス車内から見学 09:50 気仙沼市→南三陸町へ移動 10:30 南三陸町内を移動・見学 11:00 バイサイドアリーナ近くの食堂へ 11:30 昼食(食事をしながらオーナーの話) 13:00 歌津中学校到着, 校長先生の話 14:30 歌津地区発→仙台湾に移動 17:10 仙台湾→蒲生方面へ移動・見学 18:00 仙台駅到着, 解散 【備考】以下の見学・活動も実施 8月22日: 仙台市の被災企業訪問 8月25日: 亘理町の被災学校訪問(特別授業担当), 七ヶ浜町にてボランティア活動等</p>
--

ことを希望する者などもいた。こうした学生に対応して、災害経済学を専門とする教員が、被災企業を訪問・見学するツアーを企画し、8人の学生がこれに参加した。また、ボランティア活動希望者には、仙台近郊で活動する災害NPOを紹介し、その活動に6人が参加した。

津波被災地訪問見学のプログラムには学生達の意見を反映できなかったが、現地集合・現地

解散にしたことで、学生達が自分の行程を主体的に組んでいこうとする動きを促していたと考えられる。

現地集合にしたことで、偶然トラブルに巻き込まれた学生もいたが、彼らにとっては、期せずして、非常時対応を実践する機会となった。また、帰阪後に「コストと安全の関係を、身を持って体験した」という意見も聞かれ、このトラブルから多くの学びを得ていたことも伺える。

3. 他のプロジェクトと活動報告

3.1 被災地での調査活動

2011年度は、「津波被災地訪問見学」以外にも、2つの調査活動を「被災地に学ぶプロジェクト」として実施した。以下にその概要を紹介する。

(1) 被災大学初動対応調査

- 実施日: 8/10, 9/1-3, 9/15-16
- 参加者: 6人(延べ)

同じ大学という機関が、大規模災害時にどのような対応行動を取ったのかを学ぶことを目的として、学部の危機管理マニュアル作成に取り組む学生(危機管理委員会・支援スタッフ)と教員有志が、被災した福島大学(8月10日)、岩手県立大学(9月1-3日)、石巻専修大学(9月15-16日)の教職員に聴取調査を行った(延べ6人参加)。

調査から、安否確認等の危機対応だけでなく、入試や学期の変更など、教育事業の継続がいかにかに困難であり、かつそれらをいかに継続させていくかが大学にとって非常に重要な課題であることが明らかになった。学生達は、自らも関わったミューズキャンパスの危機対応マニュアルを傍らに置いて積極的に質問すると共に、正確な聴取記録を作成し、貴重な体験を記録に残すことにも貢献した。

(2) 「ふるさと応援隊」による農山漁村における復興支援活動に関する調査

・実施日：2/27～3/19

・参加者：22人

被災地域の経済復興を支援する事業を行っていた一般社団法人キャッシュ・フォー・ワークの依頼を受け、被災3県で復興を支援する活動取材し、その記事をブログやツイッターを通じて発信する学生調査員を募集、応募してきた学生に研修を行い、被災3県の4カ所に「ふるさと応援隊」として約3週間派遣した³⁾。

現地では、取材の前に、ボランティアとして復興支援活動に参加して欲しいと依頼されたり、文化の異なる極寒の地域で、不便な生活を強いられることもあったが、学生達は様々な依頼や課題に対して柔軟に対応した。また、高齢化が進む地域で、若者の元気な姿は、現地の市民団体や被災者に喜ばれた。最終的に、当初の派遣予定15人を大幅に上回る22人を派遣した。

3.2 活動報告—記録し、伝える

現地で学生達が得た気づきや学びを、その場限りのものにせず、社会安全学部での学びや研究につなげ、参加しなかった学生にも伝えてもらうことも、このプロジェクトで取り組んだ課題の一つである。

2011年度は3つのプロジェクトを実施したが、これらに参加した学生達には、現地で見聞きしたことを文章にまとめたり、自分達が経験したことを他者に伝えるという活動に、何らかの形で携わった。

(1) 経験を記録にする—レポートとパネル

「津波被災地訪問見学」では、帰阪後、参加者全員に感想レポートの提出を求めた。学生達は、現場で聞いた声を持ち帰り、それらをレポートにまとめた。また提出者の中から有志を募り、

集まったレポートを再編集する形で、学部内の展示スペースに掲示するパネルの制作に取り組んだ。

「被災大学初動対応調査」でも、上述の通り、調査員として参加した学生は、ヒアリング調査の議事録を作成し、貴重な記録の作成に寄与した。また調査から得られた知見を、展示用のパネルにまとめた。

「ふるさと応援隊」による復興支援活動調査は、現地で取材した記事を発信することそのものが活動の柱になっており、調査員の学生達は、現地で活動しながら、ホームページ、ブログ、ツイッターといった媒体に積極的な情報発信を行った。

(2) 経験を伝える—活動報告会の開催

現地で体験したことを、口頭で発表する活動報告会にも積極的に参加してきた。学部内には、本プロジェクト以外でも、関係団体を通じて被災地でボランティア活動を行ったり、大阪で後方支援活動に携わった学生もおり、2011年度に行った活動報告会は、これらの学生達も参加する形で行われた。報告の場としては、オープンキャンパス、ミュージックキャンパス祭など、学内外から人が集まる機会を利用して行うことが多かったが、東日本大震災から1年目を迎える直前の3月9日には、ミュージックホールにて「第2回社会安全学部ワークショップ」として単独の活動報告会も行った。

多くの学生が、自らの体験を形にして発信することに熱心に取り組み、学部での学習にも生かされていることは、本事業の一つの成果であると言える。

4. まとめにかえて—教育実践としての意義と課題

本稿では、2011年度に学部として行った、「被

「被災地に学ぶプロジェクト」の立ち上げから企画、実施に至る経緯と、その中で得られた知見を紹介してきた。今回のプロジェクトが、学生達の学びと今後の学部の教育にどのような貢献を果たせたのかについては、まだ十分な考察を行える段階にないが、最後に、一連の活動を振り返り、得られた知見を整理し、まとめて代えたい。

今回、本プロジェクトに参加した学生達の中には、帰阪してからも訪問先でお世話になった方々と連絡を取り合い、個人で再び現地を訪問するなど、被災地との交流を続けている学生もいる。こうした交流を通じて災害や復興の問題に関わり続け、さらに仲間を増やしながらかつ活動している学生が出てきている。たとえ少人数でも、本プロジェクトが、社会安全学部の活動や研究をリードする人材の育成につながったことは、評価したい。

また、全学部生に募集をかけたことで、それまで全く接点の無かった学生同士が交流することになったが、個別の研究室の枠を超えて学部としての、共通体験が持てたことも、学生達にとって、貴重な機会であったと考えられる。

プロジェクトの企画・実施は、教員主導で行ったため、学生達の主体性や創意工夫を十分に生かしたプログラムづくりという点では限界はあったが、学生達に学びや実践の重要な機会を提供することはできていたと考えられる。

本プロジェクトはまた、危機に備え、対処していく思考・能力を持った人材育成をしていくことが期待されている教員にとっても、多くを学ぶ機会となった。

まず、学生を引率する中で、多くの課題に直面し、臨機応変な対応を求められ、そこから学んだことも多かった。「津波被災地訪問見学」と「被災大学初動対応調査」では、現地を往復する

移動でトラブルが発生し（夜行バスの遅れや天候不良による飛行機のキャンセル等）、凶らずも、引率時の対応に必要な知見を得ることになった。

また、「ふるさと応援隊」による復興支援活動調査では、厳寒の地域（遠野、久慈、気仙沼、須賀川）で、多少危険を伴う活動などもあり、学生達の安全衛生を確保するために様々な対策が求められた。とりわけ遠野に入った学生達は、3週間に亘って公民館施設で自炊・共同生活を行うことになり、生活面での配慮も求められた。

これらへの対応として、教員自身も、地元との連携・交渉、リスク管理（保険の選択等も含む）、被災現場で学生を組織化し、指導する、という貴重な経験を積む機会を得ることになった。

東日本大震災が引き起こした一連の物理的被害、さらにそれに伴う深刻な社会的問題は、東海・東南海・南海地震の切迫性が指摘されている関西圏に住む我々にとって人ごとではない事象である。「社会安全」を掲げる本学部は、災害への直接の貢献と併せて、この災害から多くを学び、それらを将来の災害に活かしていくことが求められている。特に、社会貢献型の人材育成に対する社会的期待は高い。本プロジェクトを通じて得た知見を、本学部における教育実践に役立てていく検討を続けていきたい。

謝 辞

本報告で紹介した学生支援事業は、平成23年度関西大学特別研究・教育促進費「災害研修プログラムの企画・実施、及び災害対応経験の記録化を通じた実習型授業の充実化」（研究代表者・菅磨志保）の助成をいただくことで実現することができました。記してお礼申し上げます。また研修の実施に際しては、千里山キャンパスの学生支援室や地域連携センターのスタッフの皆さまに様々な便宜とご協力をいただきました。そして、被災地で我々を受入れて下さった支援団体・大学関係者・被災者の皆様

に、心よりお礼申し上げます。被災地の一日も早い復興を祈念しています。

注

(1) 「津波被災地訪問見学」の現地での活動については、学部ホームページの以下のサイトで紹介している。
http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_ss/life/project01.html (2012年12月31日確認)

(2) この団体は、学生の学びを支援するNPOを母体にしており、本学部の趣旨を理解して協力を申し出てくれた。

(3) 「ふるさと応援隊」による取材記事は以下のサイトから閲覧できる。
http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_ss/news/2012/03/post_134.html (2012年12月31日確認)

(原稿受付日：2013年2月1日)